

極彩色で彩られていた日本の建築

城 一夫 共立女子短期大学

昨年末、学生を引率して日光東照宮に研修旅行に行ったとき、東照宮の若い神官が「昭和の初めにドイツの建築家のブルーノ・タウトという人がやって来て、日光東照宮を醜悪な建物と云ったために、東照宮は長い間、建築家の間で高い評価を受けなかった」と残念そうに話していた。色彩建築を数多く作った表現派のタウトが桂離宮を絶賛し、日光東照宮を「建築の墮落」と評したことが、その後の日本建築、特にモダン建築の潮流の中での悪評を決定的にしてしまったことは間違いのないことで、この若い宮司の憤懣やるかたない悔しさを十分に理解させるものであった。

日光東照宮は徳川家康の廟所であり、その建築様式は陰陽五行説に忠実に従って建造された。建築の色彩は、五行の色（青＝緑、赤、黄＝金色、白、黒）で彩色されており、そこには龍、鳳凰、麒麟、白虎などの聖獣を始めとして12支、そして牡丹、蓮などの華麗な動物や植物の建築装飾が極彩色で彩られている。江戸時代の日光東照宮の参拝客は、この極彩色に彩られた家康公の廟所の華麗さを見て、陽明門前で「日暮らしの門」といわれるほど茫然と立ち尽くしていたといわれるのも、無理からぬことと思われる。

古来、日本建築は華麗な色彩に彩られていたのではなかったか。京都遷都千二百年祭で再現された平安京の遺影は、まさに羅城門から朱雀門、大極殿に至るまでの平安京の建物や伽藍が朱と白と緑とそして黄金の仏像群に彩られていたことを物語っている。我々はこの当時の平安京の建物を現在の平安神宮の朱と白と緑の色彩にその面影を伺うことが出来るのである。また、現在、重厚な建造物として知られている蓮華王院（三十三間堂）もまた朱色に彩られていたということが最近の研究で分かってきた。さらに法隆寺も朱に彩られていたことは、昨年色彩学会で発表された通りである。いずれにせよ、従来の日本建築は極彩色で彩色されていたという点から日本人のもっている色彩観をもう一度見直す必要があるであろう。

色感は四季・勘から？

小町谷 朝生 東京芸術大学

いまは昔、非常勤で出ていた大学で学生たちに色紙で感情表現を試みさせていたころの話。ごく簡単な課題を与えて、何かしら表現してもらっていたときのことだが、四季といったら通じない学生が一人いた。彼女は「わたしの国には季節の変化ありません」などと、かわいげないことをかわいい顔して行って、私に目を回させた。当方も若くて、純情で、無知だった。

沖縄のサクラはベニヒカンザクラという種類である。それが気温のせい、咲き始めると延々一カ月間咲き続ける。つまり、咲き始めはきれいなのだが、一週間も経つとショボクってきて、そんな感じのまま以後の三週間は枝にしがみついている。だから、朝日で見ようと、ちっともいさぎよくない。沖縄でヤマト心を問おうなどはそれ自体認識不足なのだが、それにしてもそこにはひどい感覚落差がある。

「感覚」というものがどうすればうまく育つのかももう一つ分からないでいるが、どうやら自然育成的な面が大きい意味をもっているらしい。とすれば、DNAの問題よりも、日常の起居のふるまい一切のほうが、重要な要素になるということだろう。さすれば、目配り心くばりという言葉があるのだから、「感覚くばり」という言葉があっていいだろう。

四季の季節感の変化についての感覚も、歌詠みの伝統に触れているわれわれにあっては、シャープな感覚くばりで感度よくとらえられるはずである。しがみつくサクラしか見ていない人のサクラ観は、やはりしがみつきの流であって、駒がいさむサクラに関われない。

色彩感覚も、日常的な目配り・感覚くばりによって、鈍にそのままよりは洗練できるだろう。つまりは、心がけ次第。「まことのみ言い述べん」と力み返るのはウソをつくよりまだましかもしれないが、それも所詮は細工のうち、自然に洗練された色彩感覚が流れ出るようになればいいなあと思案じ八べってしまうのは、どうやら「老いの小文」で、お節介やきの年齢になってしまったということであるらしい。